人権通信

令和二年一二月二三日発行　第四号
発行　城ノ内高校人権委員会
レベラーズ

こんにちは、人権委員会です。二〇二〇年は最後まで新型コロナウイルスに振り回されましたね。始まったときにはまさかこんな一年になるとは想像もしていなかった人が多いのではないかと思います。二〇二一年は丑(うし)年だけに、新型コロナウイルスは「モー」たくさん、「ウシ」ろを振り返ることなく進んでいきましょう。また、六年生の皆さんが、合格を「ギュッ」とつかめるようお祈りしています。

さて、今回は六年生の人権委員の皆さんが担当です。また、レベラーズ部の皆さんにも「ひのみね支援学校との交流・共同学習」について書いてもらいました。

新型コロナウイルスの影響によって延期された東京オリンピック・パラリンピックの開催が近づいてきました。二〇二一年七月から九月にかけて、健常者の競うオリンピックに対して、障がい者によるもう一つのオリンピックである「パラリンピック」が開催されます。皆さんはパラリンピックにいくつの競技があるか知っていますか？なんと二十二競技もあるのです。現状ではパラリンピックはオリンピックほど知名度は高くありません。しかし、障がいを越えて全力で競技に取り組む姿は、私たちに大きな感動と力を与えてくれます。

もともとパラリンピックは、さまざまな障がいのあるアスリートが創意工夫をこらして限界に挑むことを目的とし、多様性を認め、誰もが個性や能力を発揮し活躍できる公正な機会が与えられている場です。ここで、私たちの社会について考えてみると、このような機会は本当に公正かつ十分に与えられているのでしょうか？欧米などの諸外国と比べてみても、日本の社会整備は障がい者支援という面では遅れています。例えば皆さんが、車いすで生活しているとして、私たちの周囲を見てみると、まだまだ対策が必要なところが多く見つかるのではないでしょうか。障がいの有無にかかわらず、誰もが過ごしやすい社会を実現するために、私たち一人一人がいろんな立場に立って、考えていくことが大切です。まずは自分の身の周りのよりよい環境づくりに取り組んでいきましょう。

六五ホームルームのAさんの意見発表を聞いて、新型コロナウイルスの流行によって、人々の心の弱い部分が分かったように思う。正しいことを知らない、よく分からないという恐怖が、周りの人を傷つける発言につながってしまうと感じた。無知であることによって根拠のないうわさを信じてしまい、間違った情報が拡散してしまう。自分は新型コロナウイルスに感染しないと思い込み、感染した人を差別してしまう人もいるだろう。

しかし、すべての人が新型コロナウイルスに感染するという意識を持つことが大切だ。自分は違うといった変な意識が、ハンセン病元患者に対する差別や部落差別などと同じく、新型コロナウイルス感染者などに対する差別につながったのだと思う。無知であるゆえに、新型コロナウイルスに対する恐怖から少しでも目をそらすために、他人を差別することでその恐怖からのがれようとするのだろう。

徳島でも新型コロナウイルス感染症にまつわる差別が起こった。最初、徳島では他県に比べて感染者が少なかったために、最初に感染した人に対する差別や偏見、誹謗中傷がすごかったように思う。最初に感染した人が悪いという思い込みを持つ人が少なからずいたということだろう。県外ナンバーの車に石を投げつけるといった行為もその一つだろう。

無知であることはとても怖いことであり、他人を知らないうちに傷つけてしまう。差別はきっと無知から始まるのではないかと思う。自分の知らないことに対する恐怖を抱く前に、正しいことを知ろうとする努力が大切だと思う。

近年、インターネットの普及に伴い、インターネット上におけるいじめ、いわゆる「ネットいじめ」が深刻化しています。これは、パソコンやスマートフォンなどを用いた、インターネット上で行われるいじめのことです。「ネットいじめ」で一番恐ろしいことは、ＳＮＳにおける書き込みの多くが匿名で行われるため、被害者からは加害者側の顔や名前がわからず、また加害者も自分がいじめに荷担したという実感が生まれにくいことにあります。さらに、一度書き込んでしまうと、インターネットは拡散力が高いため、一瞬にして世界中に広がってしまい、消すことができません。実際、ＳＮＳ上で悪口を書かれたり、嘘の情報を流されたりしたことが原因で、亡くなった人すらいます。

では「ネットいじめ」を受けたら、どのようにすればよいのでしょうか？「ネットいじめ」は展開が早く、悪意のある情報がすぐに拡散してしまいます。また、一度拡散してしまうと、その動きを止めることや削除することはきわめて困難です。さまざまな二次被害を防ぐためにも、一人で悩まず、すぐに誰かに相談することが大切です。そのためには、被害者が気軽に相談できる場所をつくるとともに、どこに相談すればよいかを普段から周知しておくことが大切です。

また、「ネットいじめ」をなくすためには、意識の向上を図ることが最も効果的です。全ての人が被害者の立場に立ち、その人と同じ気持ちになれば、「ネットいじめ」を減らすことができるとともに、インターネットをより有効に活用できるのではないかと思います。

私は、ジェンダーに関する問題について取り上げたいと思います。日本には以前から、男性は仕事、女性は家事、といったように、男性と女性を区別するような考え方があります。そしてこのような区別は、私たちの身の回りにもあります。例えば制服ですが、城ノ内では男女で制服が分けられています。私は制服を男女で分けるのではなく、自分の好きな方を選べるようにする方が良いと思います。固定的な性別役割分担意識は、時代が進むにつれてなくなりつつありますが、まだ完全になくなったわけではありません。

このような考え方がなくならない要因として、昔からの固定観念があると思います。日本はジェンダーに関する考え方が遅れていて、世界経済フォーラムの「グローバル・ジェンダー・ギャップ指数」のランキングは、一五三カ国中一二一位(二〇一〇年)であり、とても低くなっています。この数値だけ見ると、政府や企業が何も取

り組みをしていないように思うかもしれませんが、政府や多くの企業では、ジェンダーによる格差をなくすための取り組みをしています。それでもこのランキングが低いのは、自分たちのアイデンティティについて考える機会が少ないのが原因であると思います。自分はどのような人間なのか、自分の好きなところや嫌いなところはどこなのか、など自分自身を見つめる時間をもっと作るべきだと思います。

私は以前、学校で「ワンダー　君は太陽」という映画を見たことがあります。この映画は、先天性の障がいのある生徒が、さまざまな困難に立ち向かい、周りとともに成長していくというものです。少年の視点だけでなく、複数の人物の視点も取り入れられており、「見た目ではなく中身を知る」ことの大切さが伝わる映画です。この映画から私は、各々が持っている、他の人と違う個性をお互いに受け入れるにあたって、どちらの側にも葛藤があり、その苦しみから逃げ出しそうになってしまいますが、そこを乗り越えることで、今までよりも圧倒的に楽しくなれると感じました。

おそらく現在の日本は、ジェンダーによる格差をなくしたいが、なかなかなくすことができないという葛藤の中にあると思います。ですが、そこを何とか乗り越えることで、ジェンダーによって分けられた世界から、さまざまな個性が輝く世界が実現できると思います。みなさんもぜひ、自分の本当のアイデンティティについて考えてみて、本当の自分を見つけてもらえればと思います。同時に、周りの人に対しても、男性・女性という区分ではなく、一人の人間として個性を尊重することができれば、自分だけでなく他者も輝くことができ、結果としてジェンダーによる格差をなくすことにもつながると思います。

皆さんは、新型コロナウイルス感染症に対して恐怖心を抱いていますか？「はい」と答えた人は、その理由を尋ねられた時どのように答えますか？「周りに迷惑をかけるから」「重症化すると死に至る可能性があるから」それから、「感染するといじめられるかもしれないから」と答える人もいるかもしれません。

新型コロナウイルスの感染拡大によって、感染者や濃厚接触者、医療従事者などに対する中傷やいじめなどの人権侵害が社会問題化しています。その中の一つに県外ナンバーへの差別があります。皆さんは、県外ナンバーを見た時、徳島ナンバーの車と違う目で見ていませんか？そういうささいなことでも差別につながります。

感染したくない、そう誰しもが思います。だからこそ、私たちの誰もがついつい感染者やその恐れのある人を遠ざけたり差別してしまったりする可能性があります。ですが、ウイルスは感染する人を差別しません。誰もが感染する可能性があります。私たちが過度に恐れ、遠ざけようとする心が、差別につながっていくのだと思います。感染者や周囲の人たちに対して、差別ではなくねぎらいの心やエールを送り、ともにこの危機に立ち向かっていきましょう。

本校は、ひのみね支援学校・小松島高校・小松島西高校と、毎年交流・共同学習を行っています。昨年度は、六月に四校で「感性を爆発させよう」をテーマに、協力して美術作品の作成に取り組みました。また、十一月にはひのみね支援学校と本校の二校で、十二月には四校で、パラスポーツの一つである「ボッチャ」を行いました。「ボッチャ」は、ジャックボール（目標球）と呼ばれる白いボールに、赤・青のそれぞれ６球ずつのボールを投げたり、転がしたり、他のボールに当てたりして、いかに近づけるかを競うもので、カーリングに似たスポーツです。今年は新型コロナウイルス感染症の影響で、例年のような交流・共同学習はできませんが、作品交流やビデオメッセージなど、感染拡大につながらない形での交流を模索しています。

人権委員会・レベラーズ部では、生徒の皆さんに、この交流・共同学習について知り、興味を持ってもらえたらと思っています。そして、多くの生徒の皆さんに、積極的に参加してもらえることを期待しています。そこで今回は、昨年度の交流・共同学習に参加したレベラーズ部員に、参加した感想を聞いてみました。

・ひのみね支援学校との交流・共同学習に何回か参加したのですが、回を追うごとに楽しさが増してきました。普段なかなか体験できないボッチャがとても楽しかったです。

・ひのみね支援学校との交流・共同学習で、今までしたことのない体験をすることができました。特に印象に残っているのがボッチャです。ボッチャとは、目標球と呼ばれる白いボールに、赤・青のそれぞれ六球のボールを投げ、どれだけ近づけるかを競うスポーツです。交流・共同学習に参加し、ボッチャを経験したことで、他の人と協力することの楽しさを改めて実感することができました。

・ひのみね支援学校は、さまざまな病気や障がいを抱えた同年代の生徒たちが通っている学校です。行く前はうまく話せるか、うまく接することができるかなど、少し不安に思っていました。ひのみね支援学校に着くと、たくさんの生徒たちが迎えてくれました。ひのみね支援学校の生徒たちと、木をモチーフにしたさまざまな美術作品を作ったり、ボッチャをして身体を動かしたりしました。ひのみね支援学校以外の生徒とも交流することができ、楽しい思い出になりました。

・ひのみね支援学校との交流・共同学習では、ボッチャという競技をしました。誰でも盛り上がる面白いスポーツです。それを通じて話をしたり、チームを作って協力して他のチームと競い合ったりしながら交流を深めます。毎回チームも違うので、いろんな人と話すことができ、とても良い機会になりました。

今年度は新型コロナウイルス感染症のため、従来のような交流・共同学習ができなくなったことから、各学校ごとに動画を作成して交流することになりました。ひのみね支援学校との交流・共同学習に興味のある人は、ぜひ動画作成に協力してください。また、新型コロナウイルス感染症が収束して、再び交流・共同学習ができるようになった時には、多くの生徒の皆さんに参加していただければと思います。

六年生の人権委員の皆さんの意見はどうでしたか？
生徒の皆さんも、この機会に人権問題について考えたり、家族と話してみたりしてください。この人権通信を、人権について考えるきっかけにしてもらえるとありがたいです。